



Title	[書評] 高橋俊三 (TAKAHASHI, Toshizo) 著 『琉球王国時代の初等教育』
Author(s)	石崎, 博志
Citation	International journal of Okinawan studies, 4(1): 147-151
Issue Date	2013-09-02
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/35945
Rights	

[書 評]

高橋 俊三 (TAKAHASHI, Toshizo) 著

『琉球王国時代の初等教育』

榕樹書林 2011年 322ページ

石 崎 博 志*

はじめに

『琉球王国時代の初等教育』(以下「本書」)は、「八重山における漢籍の琉球語資料」という副題が添えられているとおり、現在八重山に所蔵されている漢籍に記されている琉球語を分析した一書である。本書は琉球における漢文訓読のあり方を言語学的に分析した本格的著作であり、石垣の初等教育で使われた言語を分析した初めての成果である。共通語が未だ普及していない時代に、八重山地域で漢籍をどのように読み、講義したのかを明らかにすることが、本書の大きなテーマとなっている。

著者の高橋俊三氏には『おもろさうしの国語学的研究』(武蔵野書院 1991年)、『おもろさうし動詞の研究』(武蔵野書院 1991年)やベッテルハイムなどの欧文資料による歴史言語学の研究のほか、現代方言を調査した『与論方言辞典』(菊千代との共著 武蔵野書院 2005年)などがあり、その研究は多岐にわたる。このたび、琉球における言語運用の一環である漢文訓読のありかたに目を向けたのは、これまでの著者の歩みをふりかえれば、いわば必然の展開であったと思われる。しかし、この分野の研究は決して豊富とは言えず、ましてや言語研究の一環としては未踏の領域であったといってよい。著者は本書を上梓する前に『三字経俗解』の翻字および訳注(『沖縄国際大学日本語日本文学研究』第七巻第一号 2002年)、「新本家文書『小学一之巻』の翻字および訳注」(『沖縄国際大学日本語日本文学研究』第八巻第一号 2003年)、「竹原家文書『二十四孝』の翻字および訳注」(『沖縄国際大学日本語日本文学研究』第八巻第二号 2004年)を発表しており、これらの訳注を増補し、内容を訂正したものが本書の基礎となっている。

1. 本書の内容

では最初に目次を列挙し、各章の内容について説明しよう。

第一章 琉球王国時代の初等教育

第一節 初等教育の制度と教材

第二節 漢籍の琉球語訳

- 一 J・ベッテルハイムの記述
- 二 竹原家文書の『二十四孝』
- 三 竹原家文書の『三字経俗解』
- 四 新本家文書の『小学一之巻』
- 五 竹原家文書の『孟子体註』

* 琉球大学准教授 Associate Professor, University of the Ryukyus

第二章 『二十四孝』『三字経俗解』『小学一之卷』

- 第一節 文体
- 第二節 表記法と音韻
 - 一 表記法の特徴
 - 二 音韻の特徴
- 第三節 文法
 - 一 代名詞
 - 二 動詞
 - 三 形容詞
 - 四 形容動詞
 - 五 接続詞
 - 六 助動詞
 - 七 助詞
 - 八 敬語表現

第三章 『二十四孝』『三字経俗解』『小学一之卷』の校注・訳注

- 第一節 竹原家文書一〇二『二十四孝』の校注
- 第二節 竹原家文書一〇二『二十四孝』の訳注
- 第三節 竹原家文書『三字経俗解』の訳注
- 第四節 新本家文書『小学一之卷』の訳注

あとがき

本書はまず第一章で、琉球王国時代の初等教育の概要を、仲原善忠、比嘉春潮、喜舎場永珣、伊波普猷の証言を交えて説明し、本書で扱う漢籍に対して文献学的考察を加えている。第二章では、本書で主に扱った『二十四孝』『三字経俗解』『小学一之卷』に共通して使用されている琉球語の文体、表記法と音韻、文法を分析項目ごとに分析している。そして、第三章では上掲三書の校注や訳注を施している。おおよそ以上の構成をなすが、以下に内容に立ち入って説明しよう。

本書の第一章第二節二以降に本書で扱った文書の書誌学的考察が記されている。そして、p. 25では竹原家文書の『二十四孝』から得られた結論を以下のように列挙している。

「①教育史上では、八重山でも初等教育のテキストで『二十四孝』を取り扱ったこと、漢文を訓読して、意味も同時に習ったらしい。講義の内容を書くという試験があった。②八重山の学校においても、訓読語の影響を受けた沖縄方言で講義がされた。③口承文芸論・芸能論上では、『二十四孝』と「仲順流れ」や「孫の乳」とは影響関係があるものの、流入のルートが前者は学校の講義、後者はチョンダラーや歌・芝居などというように、相違があった。④八重山においても、中国・台湾・韓国・本土など同様に孝道が尊重された。」

ここでの重要な結論は、②の八重山の学校では訓読語の影響を受けた沖縄方言で講義がなされたというものであろう。さらに本書の第二章では『二十四孝』『三字経俗解』『小学一之卷』に表れた言語への考察がなされている。筆者は文体、表記において各種文体や表記が混交した様相を呈していると指摘する。文体は、琉球方言を基本としながら、漢文訓読文を含む日本語の文語文が混交した独特のものであり、また表記法においても発音どおりに表記する表音的仮名遣いや歴

史的仮名遣いのほかに、誤った類推仮名遣いの例もまじっている。このやや混乱したかみえる状況は、音韻体系や文法規則の推定を困難なものにしているが、そうした状況でありながら著者は竹原家文書『二十四孝』、『三字経俗解』、新新家文書『小学一之巻』に反映された琉球方言は八重山方言ではないという結論を導き出し、以下のように述べている。

「その言語は石垣方言ではなく、首里方言にもっとも近似しているが、首里方言そのものでなく、多分に和文、特に訓読文の影響を受けている言語であるという考えにいたった。それは久米村の方言とも考えられるが、久米村の方言がどのようなものか、不明のため分からない。ともかくこれらに書かれた言語が当時の学校で使われ、共通語の機能をはたしたのである。そして、この言語は石垣方言などに影響をあたえたであろうと推察される。」

八重山で使われたであろう文書に反映された言語が、石垣方言ではないという結論は音声面では以下の現象から導かれている。以下に引用しよう。

「③ワ行の「ヲ」は「ラ」とも「ウ」とも表記されている。(首里方言などでは区別があるが、仮字で書き分けることが困難であったのであろう。また、石垣方言などでは「ブ」に対応するのに「プ」と書かれていないことは、石垣方言ではないことを示すものである。」(p.33)

この結論は、第二章第三節で文法面からのアプローチも試みた上でのものである。この点は特筆に値する。

本書では第三章に最も多い紙幅がついやされている。第三章第一節の『二十四孝行』の校注においては、龍谷大学本『全相二十四孝詩選』の乙本、日本古典文学大系『御伽草子』、徳田進氏蔵本『二十四孝諺解』、寛文乙巳稔上陽吉旦婦屋仁兵衛尉印行の『二十四孝行抄録』、鴨脚家旧蔵本『二十四孝カナ抄』、『首書二十四孝』、中国書店の『二十四孝』の実に8本と校合し、原本の誤りを指摘している。これほど多くの版本とつき比べているのは、竹原家文書『二十四孝』には、端書きや奥書きがないことによる。考証の結果、竹原文書の『二十四孝行』は『全相二十四孝選』抄系の「五言詩注釈型本」とし、さらに米沢文庫蔵本『二十四孝抄』と深い関係があるとしている。そして、文の不慣れさや朱筆の多さから、旧制度の学校において行われた試験の答案である可能性を示唆している。

第二節においては、『二十四孝』の翻刻と現代語訳、注が記されている。本文の翻刻では脱字を()、高橋氏が補った文字を[]で示し、翻刻の左隣に現代語訳を挙げている。そして、注を付して翻刻や現代語訳の意図、解説を加えている。

一方、『三字経俗解』と『小学一之巻』については、筆写年代が分かっている。前者は上巻末尾に「光緒十壹年乙酉冬十二月誌之 梅孫著」、下巻末尾に「光緒十二年午戌春二月誌之」とあり、明治十八年から十九年(1885年～1886年)に書き写されたことが分かる。後者は「道光二十三癸卯年二月二十二日……真山戸 当歳拾壹」とあることから、1843年に講義の受講者(当時11歳)によって書かれた可能性が高いとされる。そして『小学一之巻』は江戸の儒学者である宇都宮遯庵(1633-1707)の『小學句讀口義詳解』との類似性が強いことが指摘されている。

2. 本書の学史的意義

本書の校注・訳注は、テキスト・クリティックが詳細になされており、原書の誤字を正しく改

めている。翻刻には文字の同定の正確さが肝要であることは言うまでもないが、判読不能な箇所をどのように取り扱うのかは、翻刻の適否を判断するためのポイントとなる。本書は不明な点もありのままに提示する姿勢を貫き、原書の虫喰いなどから判読不可能な箇所もその旨を述べて挙げている。この姿勢は、一点一画も忽せにせず本書に向き合う読者には非常にありがたく、また後進が範とするものである。そもそも写本はその性質上、入手そのものが困難であり、ましてやその内容を即座に理解するには、一定の習練が必要である。本書によって、写本に不慣れな読者も八重山の漢籍に親しめることは、極めて有益である。こうした地味ながら着実な作業に基づいた立論が、著者の真骨頂といえよう。

本書は著者が近年取り組んできた論文を集大成したものであり、琉球語研究において新たな境地を拓くものである。琉球における教育史、漢学史、言語史、また漢学から派生する芸能史を研究する際には、今後は避けて通れぬ一書なろう。本書では『二十四孝』『小学』『三字経』の教育・思想・芸能などにあたえた影響を詳しく具体的に考察していくことが今後の課題であると述べているが、これは評者も首肯するところである。

おわりに

最後に評者が抱いた疑問や今後の課題について述べたい。『二十四孝』『三字経俗解』『小学一之巻』などの八重山の教科書に、八重山の発音ではなく、和文、特に訓読文の影響を受けた首里方言に近い方言が反映しているという本書の結論は、妥当なものと思われる。では、なぜ八重山の教科書に首里に近い方言が反映されているのか。筆者はこうした言語が当時の学校で使われ、共通語の機能を果たしたと述べている。確かに、訓読の作法に表れた言葉は日常言語とかけ離れた言葉遣いであるが故に、どのような方言の話し手であってもさほど大きな違いとして表れてこない可能性もあったであろう。今後は、八重山で教鞭をとった人々の素性についても、検討する必要がある。そして、こうした書き言葉が八重山のみならず、琉球弧の各地域の共通語形成の基盤を形作った可能性についても、さらなる探求が必要である。

また、今後の課題としては、琉球における訓読語を反映する他のテキストと比較して検討することも必要であろう。例えば、漢文訓読に使われたと思われる言葉を収録する李鼎元『琉球譯』や、『官話問答便語』など官話テキストに記述されている訓点や送り仮名などがそれに当たる。一般に漢語の口語を学ぶために使用したと思われる琉球の官話テキストに、読み下しのための訓点が付されているものもある。これらは「官話」テキストが直読の他に、訓読でも読まれていたことの証憑である¹⁾。

また、得能・木津 2001 は、竹原家文書に収められる梅孫著の「漢文」を紹介し、翻刻を行っている。「漢文」は琉球人が中国人と接触した際の、中国側からの質問に対する返答をまとめた案文集である。因みに梅孫著は『三字経』を沖縄の言葉で注解して『三字経俗解』を作った人物である。竹原家文書の「漢文」と、その重要な部分のオリジナルに近いともくされる慶田城文書「漢文集」、そして宮良殿内文書の「漢文集」などと比較することで、初等教育において漢文を学ぶ行為が、文化的な素養を高めるにとどまらぬ、対外的な意味合いも有していたと考えるべきであろう。今後はこうした資料と本書の記述をつき合わせ、本書で得られた結果の傍証とすることで、漢籍を読む行為、官話を学ぶ行為を通じた言語生活の実像がより鮮明になるものと思われる。

如上の課題があるとはいえ、それらは本書の価値を損なうものではない。むしろこうした課題は本書が後の研究に大いに寄与することの証左である。一例を挙げると、八重山地域においても、変体漢文の文体で家譜が書かれ、各種行政文書も候文で書かれているが、こうした八重山の文書

がどのように作られ、これらに八重山の教育がどのように寄与していたのかを考察することは、本書を基本としてなされるべき極めて重要な課題である。

側聞するところによると、故喜舎場永珣氏、故喜舎場一隆氏の旧蔵書が八重山県立博物館に収められ、蔵書整理が進められているようである。喜舎場氏の蔵書のなかには、本書に関連した書物が含まれている可能性は十分にあり、本書で記された内容をさらに補強する、あるいは新たな知見を加えることができるかもしれない。本書の存在を基礎として、さらに八重山地方の初等教育への理解が深まり、この分野のさらなる進展を期待する次第である。

注

- 1) また、『官話問答便語』などで使用されている義注、音注は明らかに南方の漢語話者によるものであり、これらは琉球の官話テキストが琉球人のみならず、漢語話者の官話学習にも使用されていた可能性を示唆している。

参考文献

- 石崎 2010: 石崎博志「琉球の文体の変遷からみた『琉球譯』の言語」2010年3月、沈国威・内田慶市編著『近代東アジアにおける文体の変遷——形式と内実の相克を超えて』pp.147-167. 白帝社
- 石崎 2001: 石崎博志「『琉球譯』の基礎音系」2001年9月、沖縄文化研究所『沖縄文化』92号、pp.1-24
- 得能・木津 2001: 「《資料紹介》「漢文」(竹原家文書)「漢文集」(慶田城家文書)」石垣市立八重山博物館『石垣市立八重山博物館紀要』第18号 pp.55-117.

僭越ながら、個人的な言葉に紙幅を費やすことをお許し頂きたい。思いがけず本書は著者の遺作となった。評者は著者より本書を献呈されながら、内容に関する具体的な感想を直接お伝えすることができなかった。痛恨の極みであり、この時ほど我が身の怠惰をのろったことはない。ご退職後めっきり減ったが、かつて高橋先生は毎週私の研究室に足をお運び下さり、琉球や沖縄の言語に関する意見を大いに交換した時期があった。先生は我が研究の最大の理解者であり、そうした充実した時間がもう戻って来ないことを思うことは、大変つらい。遅ればせながら、本書評を御霊前に捧げることにしたい。